

## 親鸞の他力の念仏

斎藤 真希

### 1. 浄土教

この発表においては、親鸞の念仏思想について説明したいと思う。親鸞は日本の中世の人で、浄土教の伝統に連なる仏教者である。なので、はじめに少し浄土教というものについて説明したい。浄土教というのは、大乘仏教の中の一派である。浄土教は、「無量寿経」「観無量寿経」「阿弥陀教」などを主な経典としている。

浄土教の特徴は、極楽浄土に往生することを目的としていることだ。極楽浄土というのは、阿弥陀如来という仏の国である。この国は美しく、清浄である。例えば、経典では宝石の木や、綺麗な池がある素晴らしい場所として描写されている。そして、この極楽浄土はただ美しいだけではない。極楽浄土には、苦しみや仏道修行への妨げが一切存在しない。なので、極楽浄土においては、非常に簡単に仏道修行を行うことが可能であるのだ。このことは、つまり極楽浄土では人間は簡単に仏になることができるということである。

浄土教においては、このように優れた国に往生する、すなわち死んでから生まれ変わることを目指している。なぜならば、極楽浄土に往生することによって、速やかに仏になることができるからだ。なので、極楽往生の目的は、単に美しい国に生まれて快樂を受けるということではないのである。極楽往生の目的は、仏道修行に適した国に生まれ変わって修行し、速やかに仏になることであるのだ。

極楽往生するための方法には、いくつかの種類がある。それは例えば、観想念仏、称名念仏、様々な善行をおこなうことなどである。観想念仏というのは、極楽浄土の有様や阿弥陀如来の姿を思い浮かべることである。これは、一種の瞑想法ということが出来るものだ。それに対して、称名念仏というのは、口で南無阿弥陀仏と称えることである。念仏というと、現在の日本では称名念仏の方を思い浮かべるのが普通である。浄土教が中国で発展し、日本に伝わってゆく過程で、称名念仏は往生の方法として重視されるようになっていったのだ。

### 2. 称名念仏と他力

親鸞においても、往生のための最も正しい方法は、この称名念仏であるとされている。したがって、親鸞

思想の骨子というのは、称名念仏によって極楽往生を遂げることであるということができる。親鸞によれば、称名念仏は非常に簡単な行である。先にも述べたように、称名念仏は口で南無阿弥陀仏と称えることであるので、行為として非常に簡単なものだ。さらに、親鸞は称名念仏をする回数はいくつであってもよいという。すなわち、念仏の回数が一度きりであっても、また反対に、一生の間念仏し続けたとしても、往生するのに差支えはないのだ。

ところで、なぜ称名念仏することによって、往生を遂げることができるのだろうか。それは、本願というものが存在しているからである。本願とは阿弥陀如来の誓いのことだ。この誓いは四十八個あるので、本願のことを四十八願とも言う。本願については、「無量寿経」でその起こされた次第が説明されている。「無量寿経」によると、かつて法蔵菩薩という優れた仏道修行者がいた。彼は世界中のあらゆるものが真理を知らず、そのために苦しみを受けているのを見て、憐れみの心を起こした。そこで、彼は世界のあらゆるものを苦しみから救うために、四十八の誓いを立てたのであった。この誓いこそが四十八願、すなわち本願であるのだ。

親鸞によれば本願の主な内容は、極楽浄土という優れた国を建設し、そこに称名念仏したものを往生させるということである。極楽浄土はどんな者であっても、簡単に仏になることができる素晴らしい国である。法蔵菩薩はこのような国を建設し、そこに念仏したものを生まれ変わらせることで、すべての存在を救おうと考えたのであった。法蔵菩薩は本願を実現するために、非常に長い間修行をおこなった。その結果、彼は阿弥陀如来という名前の仏になって、仏としての力で念仏の人を極楽浄土に往生させるようになった。法蔵菩薩、すなわち阿弥陀如来はこのようにして、自分の立てた本願を実現したのである。

法蔵菩薩は本願で、称名念仏する者を必ず往生させようとした。そうして、その誓いは現に阿弥陀如来の力によって実現されている。このような事情があるために、称名念仏をするならば、必ず浄土に往生を遂げることができるのだ。したがって、称名念仏によって往生できるのは、すべて阿弥陀如来の力のおかげである。

念仏の人を往生させる阿弥陀如来の力のことを、他力と呼ぶ。この他力というのは、本願のとおり人間を往生させる力である。なので、他力のことを本願力と呼ぶこともある。他力、あるいは本願力というのは、しばしば世界中に満ち満ちる無限の光として表象されている。この無限の光は、何ものにも妨げられることはない。どんな重罪を犯した者であっても、他力によるならば必ず往生を遂げさせてもらえるのだ。ちなみに、阿弥陀如来とは、このような他力そのもののことであるとも言われている。

親鸞によれば、人間とは本来、他力というものに包まれて生きている。このような他力が、称名念仏する人に働きかけ、浄土に往生させてくれるのだ。称名念仏するということは、他力に救いとられることなのである。ところで、他力に救いとられるというのは、人間の肉身に即してみれば、他力に全てを委ねることである。したがって、称名念仏というのは、外面的な行為としては、南無阿弥陀仏と口で称えることであり、内面的な心の状態としては、他力に全てを委ねるというものであるのだ。

### 3. 自力と他力

ところで、仏教においては、自力で何らかの修行をおこない、仏になるという方法も存在する。阿弥陀如来の力を頼って極楽浄土に往生し、そこで仏になるという方法のみが全てではない。しかし、親鸞によれば、現在の人間は称名念仏をして、他力に頼る以外、救われる方法はないのだという。なぜならば、現在は末法という時代だからである。仏教には三時説という歴史観がある。これは釈迦が死んでから仏教は次第に墮落し、世界と人間はどんどん悪くなっていくという考え方だ。これには正法、像法、末法という三つの時代区分がある。正法は釈迦の死後千年、像法はその次の千年、末法は最後の一万年である。

このうち末法というのは、釈迦が死んで長い時間が経った後の、非常に悪い時代である。このような時代に生まれてくる人間は、皆悪い性質を持っていて、能力は劣っている。親鸞はこのような末法の人間のことを、罪惡深重の凡夫と呼んでいる。また、末法の時代には、人間を取り巻く環境も悪いものになっている。このように、末法に生まれた劣った人間が、悪い環境の中で修行をしたとしても、正しく修行をおこなうことは不可能である。したがって、末法においては、いくら自力で努力しても、決して仏になることはできないのだ。

これに対して、他力によって往生を遂げさせてもら

うという方法ならば、末法の劣った人間でもおこなうことが可能である。なぜなら、称名念仏によって浄土に往生するのは、すべて他力のおかげであるからだ。他力が人間を救いとして、人間の自力の計らいが何もないのに、自然に往生を遂げさせてくれる。人間はただ他力に全てを任せていればよいのであって、この時人間自身の力はまったく必要はない。したがって、自力で修行することが不可能な末法の人間は、必ず他力によって浄土に往生するという方法を選ばねばならないと親鸞は考えたのである。親鸞によるならば、人間の自力は全く頼みにならないものである。その自力の計らいが何もないのに、他力に救いとられて往生するのが、称名念仏という方法なのであった。

### 4. 自力の念仏と他力の念仏

しかし、このような称名念仏本来の意義が、十分に全うされないことがしばしばある。なぜならば、人間は誰しも自力への執着を持っているからだ。自力へ執着するというのは、言葉を変えるなら、自力を頼るということである。この自力を頼るという態度は、人間にとっては非常に基本的なものである。すなわち、人間にとっては自分の力を頼みにして、自分の力によって物事をおこなって生きてゆくことが自然なあり方なのだ。

称名念仏とは、本願に従い、他力に救いとられるということであった。他力に救いとられるということは、人間の肉身に即して言うならば、他力に全てを委ねることである。したがって、南無阿弥陀仏と称える者の心は、己の全てを他力に任せ切った状態であればならない。しかし、人間は自力への執着を持っており、自力への執着を断ちきることは非常に難しいのである。したがって、南無阿弥陀仏と称えていたとしても、内面的には自力への執着を持ったままであるということがしばしばある。このように、人間は多くの場合、自力への執着を持ったまま、称名念仏をおこなってしまうのだ。

自力への執着を持ったまま行う称名念仏を、親鸞は自力の念仏と呼んでいる。この自力の念仏は間違った念仏であり、往生の原因とはなりえないものであるとして、親鸞に厳しく否定されている。なぜならば、称名念仏とは本来、他力に救いとられることであり、そのことは人間の肉身に即して言うならば、己の全てを他力に委ねることなのであった。自力に執着しておこなう念仏において、人間は他力ではなく自力を頼った状態にある。このように、自力の念仏というものは、他力に全てを委ねるという、念仏本来のあり方に反し

ているのだ。

自力の念仏とは、人間が自力によっておこなう、自力の行為に過ぎない。このような自力の念仏を行ったとしても、他力に救いとられるということにはならず、したがって、往生を遂げることもできない。このように、人間の持つ自力への執着が、称名念仏による往生を妨げてしまうのだ。ゆえに、念仏においては、必ず自力への執着を離れねばならないのである。自力への執着を離れた念仏こそが、他力に全てを委ねた念仏であり、他力に救いとられることであるということができるのだ。

親鸞によれば、このような念仏の実現する時、その人は死後の往生が定まった状態になるという。すなわち、自力への執着を離れた念仏を行う時、その人を他力が救いとして、死後必ず往生を遂げさせてくれるのである。ちなみに、このような死後の往生が定まった状態を、親鸞は正定聚の位と呼んでいる。死後の往生が定まる状態というのは、言い換えるなら、死後の往生を確信する状態ということだ。親鸞は念仏において、己の往生を確信し、非常な歓喜の心を起こしたと言われている。

## 5. 親鸞における念仏

以上、親鸞における念仏について説明した。親鸞思想において念仏は、極楽往生のための唯一絶対の道であるとされている。ここで親鸞に特徴的であるのは、念仏が人間の自力の行ではないという点だ。往生のための手段として念仏を称えろといった場合、一般的に、念仏は自力の修行として捉えられる傾向がある。つまり、念仏という修行を人間が自力で努力しておこなった結果として、極楽往生を遂げることができるという考え方がしばしばなされるのだ。

しかし、親鸞において、このような念仏は自力の念仏として、厳しく否定されるものである。自力の念仏によって往生することを目指すというのは、突き詰めて言うならば、自力の努力によって往生することを目指すということだ。しかし親鸞の考えによるならば、極楽往生とは人間の自力で達成することのできるものではない。親鸞にとって、人間とは末法に生きる、罪惡深重の存在である。このような人間は、もはや自力の努力によっては救われることのできない存在であるのだ。

罪惡深重の人間は、自分の力でどんなに努力したとしても、往生したり仏になったりすることはできない。末法の人間はこのように非常に絶望的な状況に置かれている。しかし、そのような人間を救うために、かつて法蔵菩薩によって本願が起こされ、今現に阿弥陀如来の他力が存在しているのである。他力とは非常に強大な救いの力である。どんなに劣った人間であっても、どんなに罪の深い人間であっても、他力は区別することなく救いとってくれる。このような他力によってのみ、末法の人間の往生と成仏は実現されるのだ。

このように、極楽浄土に往生するということは、ただ他力によってのみ実現されるものである。ここには、人間自身の自力是一片たりとも入り込む余地はない。このような自力と他力の観念を持つ親鸞にとって、唯一絶対の往生の道である念仏とは、決して自力の行ではあり得ないのであった。念仏するということは、自力を全く排除して、他力に己を委ねきることである。そうして、そのことがすなわち、他力に救いとられることなのだ。このような他力の念仏が実現することにより、人間の往生は確定し、正定聚の位につくことができるのである。